

フッサールの範疇的直観について

中 川 明 博

一

志向性がフッサール現象学の根本概念であることはもはや言うまでもないことであるが、志向性においてはとりわけ直観概念が指導的役割を果たしている。それはフッサールが『イデーン』第一巻において、本源的に与える直観を「原理中の原理」とみなし、直観に認識の権利源泉を見る現象学の基本的立場を表明していることに端的に表われている。明証としての対象の自己所与性は、直観に負っているのであり、「直観する認識は、悟性をまさに理性へもたらそうと決意する理性である」(II, 92)として、直観こそが理性的と言いうる根拠を提供するのである。ところでフッサールは直観として、単に感性的直観だけではなく、範疇的直観、本質直観をも認めているが、それは本来、『論理学研究』における課題の中心が、論理学的諸範疇の解明にあったこと

と本質的に連動している。対象の所与性を、作用との相関関係において究明することは、実在的なものを与える作用への考察と同様に、範疇的なものを所与に持つ独自の作用を想定することになる。『論理学研究』第六研究においてフッサールは、範疇的直観に関して難渋な議論を展開しているが、そこにおいて考察された直観が、感性的直観と同様に「与える」直観であり、直観によって対象が「直接に」自己所与性に至るという基本的性格は終始保持され続けている。与える直観、直接的自己所与性は、与えない作用、間接的所与性に対立する、というのは単なる空虚な命題にすぎないが、それにもかかわらず、フッサールの直観概念においてこの関係は基本的な構造をなしており、また、それに制約されている。元来、見ることは何よりも見えていないものを見えるようにすることであり、また、より見えるようにすることであろう。問題は、範疇的直観がこの構造においていかなる実質的な内容と意義を持つのかということである。

二

フッサールの直観概念を特徴づけるに際し、まずそれが何ではないのか、つまり直観はいかなる作用と対置させられているのかを予備的に考察しておきたい。

たとえば、我々はたとえ対象を実際に知覚していなくとも表現を理解するし、自分は疑問を持っていなくとも疑問の表現を理解する。このような「単なる思考 (bloßes Denken)」が「意味志向作用 (Akte der Bedeutungs-intention)」なごうは「表意作用 (signitive Akte)」あるごうは「表意的作用 (signifikative Akte)」(XIX, 567)

と呼ばれる作用である。この表意作用と直観作用とが鮮やかな対照をなしているのが偶因的な表現の場合で、「ここ」「そこ」などは決して無意味ではないにもかかわらず、実際に知覚しない限り特定の対象的方向を与えることはできない。このように、表意作用は対象を思念しはするが、それは空虚な形においてであって、対象の自己所与性を獲得するには至らないのである。この空虚な表意作用に「充実 (Fülle)」を与えるのが直観作用である。直観によってはじめて「対象が直接把握され」、「対象それ自身が現在している」(XIX, 674)ものとなる。こうして直観は、表意作用には欠けていた対象の直接把握、対象の自己所与性を提供するという根本特徴を持つものと考えられている。

このように、まず直観は、表意作用に対応し、それを充実するものとして、一定の相関的構造において論じられており、この構造のもとではじめて、直観はあらゆる表意を充実しなければならないという要請が生じる。すなわち、「あるSはPである」「このSはPである」「すべてのSはPである」等の判断や「AとB」といった連接などにおいて、アルファベットで示された「素材 (Stoff)」の部分は感性的直観によって充実が可能であるが、それ以外の範疇形式はそれとは異なった作用によらなければ充実されない。フッサールが範疇形式として理解しているものは、「対象、事態、単一性、数多性、基数、関係、結合」等々の「形式的対象的諸範疇 (XVIII, 245)」たとえば「das, ein, einige, viele, wenige, zwei, ist, nicht, welches, und, oder」(XIX, 658)などの「いかなる認識資料の特殊性にも依存しない諸概念」(XVIII, 245)であり、こうした範疇形式も何らかの作用によって与えられねばならない。フッサールが直観概念を感性を越えて範疇的直観へと拡大するのはこうした事情によるのであり、トゥーゲントハットが言うように、「直観的なもののフッサールの新しい概念の本来の重要

性は、非直観的なものに関する彼の把握にあるのである」(1)。

さて、範疇的直観と感性的直観はいずれも直観として「直接性」という性格を共有している。しかし、「あらゆる知覚について、知覚はその対象そのものを把握する、あるいは対象を直接把握すると言われる。しかしこの直接把握するということも、その知覚が狭義の知覚であるか広義の知覚であるかに応じて、つまり『直接』把握される対象性が感性的対象であるか範疇的对象であるか、換言すればリアルな対象であるかイデア的な対象であるかに応じて、異なった意味と性格を有している」(XIX, 674)のである。ではまず、感性的直観における直接性にはいかなる特色があるのだろうか。充実は、知覚のみならず、想像によっても可能であるとされるが、想像の場合には、「像において (in Bilde)」 「像の相似性 (Bildähnlichkeit) の総合」(XIX, 588) によって現出し、実在の対象そのものではなく、対象の像を与える限りにおいて間接的な現前化にとどまる。これに対し、感性的直観は、対象それ自身の現在という仕方での対象の自己所与性、すなわち現前化 (Vergegenwärtigung) に対する現在化 (Gegenwärtigung) という直接性を有している。第二に、感性的直観は、この作用において対象が、順次多光線的に知覚されるのではなく、はじめから「一挙に (in Einem Schlage)」(XIX, 676) 現出するものとされる。なるほど感性的直観においても、その作用は幾つかの部分作用を含んだ複合的なものでありうるが、部分作用を非顕在的に含蓄しながらそれとして分節されることなく、「融合 (Verschmelzung)」(XIX, 678) をなしており、多光線的に顕在化、主題化されていない作用である。すなわち、他の作用に基づけられていないという「端的性 (Schlichkeit)」としての直接性を有している。

この感性的直観に対し、分節作用によって諸部分を際立たせ、それらを相関化作用によって相互に関係づけ、

イデア的な対象性を構成するのが多光線的な範疇的直観である。したがって、範疇的直観は、もはや端的性としての直接性は有していないが、しかし単に思念されただけではない範疇的な形式を備えた対象性を所与へともたらすはずの作用として、表意作用の間接性に対して直接性を有するものとされる。

このように、直観の直接性は、さしあたり対象の所与性および作用の性格によって規定されているが、感性的直観と範疇的直観の関連に関する考察は、必然的に範疇的直観の直観性の根拠への考察、すなわち範疇的对象を与える直観作用はいかにして可能かという問いを提起する。

三

まず、感性的直観と範疇的直観はいかなる関係にあるのだろうか。フッサールはそれを「基づけ(Fundierung)」によって説明している。基づけは、定義によれば、「ある α そのものが本質法則的には、それがある μ と結合するある包括的統一体の中でのみ実在しうるにすぎない場合、我々はある α そのものは、ある μ による基づけを必要とすると言ひ、またある α そのものはある μ によって補足される必要があると言ふ」(XIX, 267)というものである。すなわち、範疇的直観は感性的直観に基づけられて、その「上に(über)」のみ可能であるが、しかし感性的直観によって与えられる実在的对象を「越えて(über)」高次の対象を構成するという意味で、「超感性的(übersinnlich)知覚概念」(XIX, 672)であるといえよう。では、基づけられる範疇的直観はいかにして可能なのであろうか。

フッサールは、直観作用を統握作用とみなしている。統握は、感性的直観の場合には、体験の实的成分である感覚内容を、作用が「何(Was)」として规定的に把握することによって、特定の対象を現出させる作用であり、把握される意味が「質料」ないし「統握意味」である。フッサールは範疇的直観として判断の例をあげた際も、この作用統一の中で種々の部分関係が新しい客観として構成される「統握形式の構成」(XIX, 681)を論じている。この場合には、「Aは α である(α をもつ)」「 α はAに内在している」というように、感性的直観に基づけられつつ、「統握の立場」(XIX, 682)に応じて、二つの方向が可能とされる。範疇的に関係づけられた対象性は、統握の遂行によって構成され、そうすることによって範疇形式は充実されると考えられる。

またこの統握は「代表象(Representation)」とも呼ばれている。すなわち、ある体験の实的内容が対象の「代表(Representant)」ないし「代表象内容(repräsentierender Inhalt)」として、質料において意味的に統握されるのが代表象である。さて、フッサールによれば、志向的本質が性質と質料からなるのに対し、認識的本質は、性質、質料および代表からなるのであって、空虚な表意的志向はこの代表を持たないということによって区別される。直観と表意を区別する指標となるのは代表の有無によるのである。代表という直観性のこの指標は、範疇的直観の場合にも妥当しうるであろうか。

まず、それに先立って、範疇的直観の直観性の所在に関して、範疇的直観の認識的本質すなわち性質、質料、代表の各々が、それを基づける作用の認識的本質に事象的に依存しているかどうかを確認されねばならない。というのも、そこに依存関係が見いだされれば、範疇的直観が直観である根拠も、基づける作用の直観性に依存することになるからである。まず、性質については、我々は基づける作用が想像作用であっても、何らかの

判断を行うことが可能である。「全体作用の性質は基礎作用の性質と別様でありうる」(XIX, 695)。また、基づける作用の対象が虚構的なものであっても、それについて判断することができる。つまり、基づける作用の代表の有無には還元されない。次に質料についてフッサールは「すべての範疇的作用においては、基づけられた作用の質料は基づける作用の質料に基づけられている」(XIX, 704)と述べ、範疇的作用と基づける作用の関係を、質料の基づけによって説明している。しかし、質料による基づけならば、同じ志向的本質を持つ表意作用にも妥当することになる。それゆえ、範疇的直観の認識の本質すなわち直観性の根拠は「基づける諸作用に属する諸区別には還元されない」(XIX, 695)ものと考えられる。ここからフッサールは範疇的直観においても「代表が『空虚な』表意と『充足的 volll』直観との相違を生み出し、『充実』は代表に負っている」(XIX, 700)という指標を維持しつつ、「新しい作用も、その作用の代表を所有している」(XIX, 696)として範疇的直観に特有な範疇的代表の存在を想定する。これが「範疇的代表象」なる理論を要請した事情である。

しかし、フッサールは後年、「範疇的代表象についての理論など、多くの点をめはや承認しなう」(XIX, 535)と告白して、範疇的代表象を撤回している。したがって、この理論構制そのものが問われねばならない。

まず、範疇的直観の代表が、感性的直観の代表に対してその独自性を持つのは、後者の場合には、質料（統握意味）と代表（代表象的内容）との相互の変動を許すのに対し、範疇的直観の場合には、「基づける作用と統握形式のあらゆる変動にあって、代表象の内容はいかなる種類の基づけられる作用にとっても唯一の内容である」(XIX, 699)ことによる。すなわち、基づける作用間の心的結合形式（連接の場合ならば“und”）は、同種の範疇的直観において同一である。フッサールは、これを「心的結合帯 (psychisches Band)」(XIX, 701)と

解し、範疇的直観における代表とみなすのである。しかし、その場合、「総合の契機は、基礎作用に属する諸代表の直接的な結合を作り出すのではない」（XIX, 702）であろう。というのも、もし感性的代表を結合するのであれば、この結合による統一は「感性的統一」（XIX, 703）にすぎないからである。むしろ範疇的直観においては、「それら感性的代表の類が無制限に変更可能（variable）」（ebenda）であり、「基礎にある感性的内容に対する、範疇的な作用形式の事象的無関係性」（ebenda）が存立しているのである。しかし、心的結合帯は、対象的に統握されるべき実的内容であり、体験に属するものである。そこからフッサールはこの内容に対する反省が必要と考える。

だが、フッサールは範疇的代表を反省内容に見る一方で、範疇の起源は内的知覚の領域にあるのではない（XIX, 667）としている。というのも、内的知覚は内官に属するのであるから、依然として感性的知覚であり、端的な知覚だからである。感性的知覚によって自己所与性へと至るのは実在の対象だけであり、非実在なものである範疇はそれによつては与えられない。内的知覚は他の作用を基づけるものであつても、それ自身基づけられた高次の作用ではないであらう。

では、この内的知覚と範疇的直観とはいかなる関係にあるのだろうか。範疇的直観は、基づける諸作用を多光線的に相関化する作用である。この相関化が遂行されるためには、基づける作用に対する知覚、すなわち内的知覚を前提している。しかし、内的知覚は外的知覚と同様に、感性的知覚であり、それ自身では相関化作用を含んではいない。むしろ相関化は、反省内容（作用性格ないし内容）を統一的に把握することによつて成立する。そこでは、「内的知覚の内に感性的に与えられている（従つてそこでは感性的な代表として機能してい

る）同じ心的契機が、範疇的知覚または範疇的想像という基づけられた作用の中では範疇形式を構成することができる」（XIX, 708）とされ、「専ら反省内容だけが純粹範疇的代表として機能しうる」（XIX, 709）とみえられている。

ところで、この構造は『算術の哲学』における「多（*Vielfalt*）」や「総体（*Inbegriff*）」の概念の構成を踏襲したものと見えよう。そこでは、基礎に存する作用の表象内容は、物的なものでも心的なものでも全く任意であり、「具体的な総体の形成にとっては、把握されるべき個別内容への関係にはいかなる制限もない」（XII, 16）のであって、内容には無関係な、作用の「集合的結合（*kollektive Verbindung*）」（XII, 20）が必要なのであり、「総体」の概念は、この結合への反省を通じて成立すると考えられていた。今の場合これと同様に、心的結合帯という反省内容を代表として、それを対象的に統握するという構造を持っている。しかし、感性的内容を統握することによって實在の対象が現出することは可能であっても、反省内容は「感性の領域」（XIX, 708）に属するものである以上、「感性的内容が範疇的に統握されるという考えは不合理」^②であろう。またフッサールは反省内容を代表とする範疇的代表象の構造に定位し、同時に明証性に依拠しつつ、範疇的直観に「感性的諸内容の十全的直観」（XIX, 705）なる性格を与えているが、しかし、代表は他のものの代表としてのみ意味をもつのであるから、この場合「代」表象は成立しないものと考えられる。

しかし、それにもかかわらず、範疇的作用は、基づける作用をなんらかの形で相関化的に結合する作用である。では結局何を結合するのか。フッサールは「総合的に基づけられた作用の範疇的契機は、基づける諸作用のそのような非本質的な諸要素を結合するのではなく、その両者にとって本質的なものを結合するのである。

すなわち、その範疇的契機はいかなる場合でも、それらの志向的質料を結合するのである」(XIX, 704)と述べている。だが、既に見たように、質料の結合は、直観的な場合と同様、ただ判断を理解するような表意的な場合にも行われうる(XIX, 701)のであり、心的結合体は範疇的直観に特有なものではなくなる。すなわち、代表としての心的結合体は、直観と表意の区別を相対化するのである。では直観性の指標はどこに見いだされるべきなのであろうか。

この心的結合帯をめぐってトゥーゲントハットは、範疇的作用による代表の統握を、「この作用はその総合を、代表を基礎にして、つまり基づける作用の一定の情勢(Konstellation)を基礎にして実際に遂行する(aktuell vollziehen)」という点にある」(3)として、範疇的直観の直観性を作用の「実際の遂行」に見ている。すなわち「代表のこの統握は総合的作用が心的結合帯に対象的に向けられているということを意味しているのではない」(4)のであり、したがって「求められていた範疇的作用の直観性の基準は、単純に、思念された範疇的対象性のイデア的現在性(自己所与性)に存しているのではない」(5)。というのも、「範疇的作用の直観性は、その対象の自己所与性を引き合いに出して定義されることはできず、逆に作用の直観性を引き合いに出してのみ定義されうる。なぜなら、我々はこの直観性に対しては、その都度の総合の実際の遂行においてのみ、具体的徴表を持つことができるからである」(6)。すなわち、ここでは範疇形式を主題化することによってではなく、範疇的に形式化する作用の遂行によってのみ定義が可能であることが示されている。この場合、直観に対応する範疇的表意作用は、「単に憶測された(blos verneint)」(7)総合とみなされよう。

しかし、直観作用が実際に、本来的に遂行されるにしても、直観性が対象の自己所与性に求められないとい

うことは、少なくとも、表意と直観を区別する指標を欠くことになる。というのも、範疇的作用が結合する質料は、表意作用も共有するものであり、我々は表意作用を非本来的になら「遂行する」ことも可能だからである。ローゼンは、この点に着目して、範疇的作用の直観性を、第四研究の「自立の意味と非自立の意味」における自義の意味と共義の意味の関連⁽⁸⁾に求めている。ローゼンは、『等しい』と結び付いて『と』『あるいは』のような切り離された共義語は、一層包括的な意味全体の関連の中においてでなければ、直観的な理解すなわち意味充実を得られない⁽⁹⁾（XIX, 323）し、「自義の意味との連関においてでなければ、いかなる共義の意味も、すなわち非自立の意味志向の作用も、認識機能を果たすことができない」（ebenda）⁽⁶⁾というフッサールの論述を根拠に、「表意的なのは、孤立した共義語の意味を思念する範疇的志向であり、これに対して、直観的なのは、『一層包括的な意味全体の連関』に立つ共義的表現の意味を与える範疇的作用である」⁽¹⁰⁾としている。これは自立の意味による非自立の意味の基づけの次元に、範疇的作用の表意と直観の区別を位置づけたものであろう。もちろんその際『と』という語の意味を明確にしようとするれば、なんらかの集合作用を現実遂行し、そしてそのようにして本来的な表象に至る総体の中で a『と』b という形式の意味を充実へともたさなければならない⁽¹¹⁾（XIX, 323）のであるから、範疇的作用は作用性格としては、現実的遂行という特徴も有しているだろう。しかし、このように現実遂行に作用を遂行して、共義の意味を「一層包括的な意味全体の連関」に置くという一連の作業は、範疇的直観が「いわば対象の構成要素に即して、範疇形式を考査すること（Erprobung）」⁽¹²⁾に存しているということであらう。つまり、範疇的直観は、様々な自立の意味に基づけられつつ非自立的な範疇形式の意味を不変のものとして主題化し、意味連関の中でそれとして対象化する作用なの

である。

四

こうして、共義的意味の充実という方向は、範疇形式を包括的意味において主題化することによって、範疇的直観を理念化的抽象にとらえることになる。範疇的直観による総合的な相関化は、内容的には感性的知覚に基づく質料の結合である。しかし、実際の遂行に際して、質料は一定の実質を保有しているであろうが、範疇的直観にとって質料の実質は任意なものであろう。たとえば、「AとB」といった連接作用の場合、「本とノート」「ペンとインク」等々の作用を順次反復していく過程で、変更可能な項の実質を変えて行く。そこで不変項として残留する範疇形式が対象的に与えられるのである。シュトレーカーが「論理形式の意味充実にとって、感性的に規定された内容はなほ問題にならなかったが、単純に欠落してもいなくなったという理解が存する。むしろこの感性的に規定された内容は、一定の範囲内で変更可能なものと考えられるべきである」(12)と述べているように、実質的な質料に基づけられてはいるが、その内容は任意である。また、基づける作用は想像作用でも可能なのだが、基づける作用の性質も任意であらう。こうして範疇的直観は、質料を変更する「捨象(abstrahieren)」と言うにふさわしい理念化的抽象において結実するものであろう。

さて、フッサールは、端的な知覚に基づけられつつ、その知覚の対象を共に志向している範疇的作用に対し、理念化的抽象としての範疇的作用を、基づけられる作用が、もはや基づける作用の対象を志向していないとい

うことによって特徴づけ、区別している(XIX, 690)が、ではこの二つの作用は、範疇形式の充実という事態にとつていかなる関係にあるのだろうか。

それはまず「基づけ」によって答えられるであろう。感性的直観に基づいてある判断作用を遂行する場合、そこでは実在的対象も共に与えられている。しかし、理念化的抽象としての範疇的作用において、感性的素材は非本質的なものとして捨象されうる。しかし、このことは感性的素材を必要としないということではなく、与えられた素材が任意に変更可能であるということを示しているにすぎない。捨象されるためにはまず与えられていなければならないだろう。フッサールは「すべて範疇的なものは究極的には感性的直観に依拠しており、基づける感性を持たないような範疇的直観は、したがって悟性洞察や最高の意味での思考は背理である」(XIX, 686)と述べ、基づけを欠いた範疇的直観という理解に対して警告を発している。しかしこのことは、範疇の発生が感性的直観にあるということとも異なるだろう。むしろ、範疇は感性的直観に拠らずとも既に成立しているものと考えられる。というのも、範疇形式は非本来的、表意的に既に思念されうるからである。従って、基づけということも、發生的にはなく、表意作用の充実化という連関においてのみ意味を持つものである。

また、この両者は主題化の方向を異にしている。前者において範疇形式は、それを通じて対象性が構成されるものであるが、理念化的抽象においては範疇形式そのものが主題化されている。このことは、基づける作用に形式を与える範疇的作用において、範疇形式は非主題的に現前しており、理念化的抽象はそれを主題化、対象化する過程ととらえることができる。

さらにこのことは、範疇形式の充実という事態にとつて、範疇的直観の作用と対象という相互連関に依拠して、

「範疇形式」という概念も二義的であるということを示している。すなわち、「端的な直観の諸作用、あるいはそれ自身既に基づけられた直観の諸作用に形式を与え、そしてそれら諸作用を新しい客観化作用へと変える基づけられた作用性格」(XIX, 714)と、他方「この客観化作用は、基づける作用に比べれば、独特の仕方に変様された対象性を構成するのであり、もとの諸対象は、それを新しい仕方では握し結合するなんらかの諸形式の中で自らを呈示する」(ebende)と言われる際の「対象の意味での範疇形式」(ebenda)であり、範疇形式という概念は、作用性格と対象の性格の二義性を有することになる。これに対応して、充実にについても現実的な遂行という作用上の規定と、対象の自己所与性という対象の規定が存することになる。そしてフッサールは範疇形式のこの二義性を「自然」で「無害」(ebenda)とみなしている。だが、このいずれを充実とみなすかによって、その意味は異なるだろう。範疇的に形式化された対象性を現出させる現実的な遂行としての充実は、基づける作用の総合として認識作用であるが、「我々はいかなる基盤に基づく基づけをも現実には遂行できるのではなく、感性的素材を任意の範疇的形式の中で直観することはできない」(XIX, 717)という事実上の制限を有している。しかし他方、充実を範疇形式の対象的な自己所与性に見いだすならば、我々は任意の素材に基づいて範疇的形式化を遂行する自由を持つだろう。このことは、元来範疇的直観が、素材に対してそれに拘束されるという側面と、それを越え出るといふ両面があることを示している。フッサールは範疇的作用を「純粹悟性作用」と「感性と混合した悟性作用」とに分け、「我々が端的に範疇的概念について語る場合は常に、純粹な範疇的概念のことである」(XIX, 713)としてそこに区別を設けている⁽¹³⁾が、この純粹悟性作用の獲得へは一定の過程を要することになる。つまり、範疇的作用は、感性と混合している場合にはより実質的であり、その純粹な形

態においては形式的であって、前者から後者への形式化には実質の変更過程という段階性が存している⁽¹⁴⁾。

以上のように、フッサールにおける範疇的直観は、表意作用との関連構造において直観的な「本来的(eigentlich)思考」(XIX, 720)を実現する(realisieren)作用である。この実現を要求する理由は「意味の領域は直観の領域、すなわち可能な充実化の領域よりもはるかに広範囲である」(XIX, 721)からであり、我々は「たとえどのような直観であれ、かすかで漠然とした非本来的直観によってしか生かされていないような意味は、我々を満足させることはできない。我々は『事象そのものに』立ち返りたい」(XIX, 10)からにはほかならない。こうした現象学の志向から、範疇的直観においては、作用の遂行から範疇形式の主題化へと、段階的な明晰化の過程が内蔵されていることが理解される。フッサールは、「必要なのは説明すること(Erklärung)ではなく、意味作用、思考作用、認識作用と、そしてそこから生ずる諸理念と諸法則をただ現象学的に解明すること(Aufklärung)である」(XIX, 729)と言う。事実的な経験的連関を説明することなく、概念の起源を充実に解明することは、所与の素材への範疇の適用というよりも、自己所与性における範疇の発見への過程であろう。そして、「思考の完全性は無論『本来的』思考としての直観的思考ないしは思惟志向がいわば充足されて直観へ移行するような認識作用にある」(XIX, 172)のであり、思考の完全性は直観的思考と等価であるが、空虚で非本来的な思考が充実に至り、完全性へと至ること(vollkommen)に直観の意義が見いだされるのである。

注

Husserliana からの引用は、巻数とページ数のみを示した。(例) Bd. II. は『現象学の理念』Bd. III. は『イデアへの第一巻』Bd. XII. は『算術の哲学』Bd. XVIII. は『論理学研究』第一巻 Bd. XIX. は『論理学研究』第二巻 (p. 90°)

- (1) Ernst Tugendhat: *Der Wahrheitsbegriff bei Husserl und Heidegger*, 2. Aufl. Walter de Gruyter, 1970, S. 51.
- (2) Ebenda, S. 122.
- (3) Ebenda, S. 121. ユーゲン・ハットのもの「実際の遂行」という解釈は、フッサールの「現実的遂行 (wirklicher Vollzug)」という概念を根拠としたものである (S. 123°).
- (4) Ebenda,
- (5) Ebenda, S. 122.
- (6) Ebenda,
- (7) Ebenda, S. 125.
- (8) 自義の意味とは「論理学の創設者」「父の感情を書した息子」のように、名辞として単独に存立しうる自義語 (Kategorien) の意味のことであり、共義の意味とは「範疇形式や「父の (des Vaters)」のまわりに (um)」「それにもかかわらず (nichtsdestoweniger)」など、他の意味に補足されて具体性を獲得しうる共義語 (Synkategorien) の意味のことである。これはマルティに発する区別をフッサールが自立的意味、非自立的意味としてとらえ直したものである。(Vgl. XIX, 311)
- (9) フッサールによれば、「引き離された (herausgegrissen) 共義語」も決して無意味な首にすぎないのではなく、「事象的には全く無規定な意味補足」「あいまづる事象表象の援助」(XIX, 324) にあって、その非自立的な意味理解が可能とされる。つまり、表意的には思念可能なのである。
- (10) Klaus Rosen: *Evidenz in Husserls deskriptiver Transzendentalphilosophie*, Verlag Anton Heim, 1977, S. 70.
- (11) Ebenda, S. 135. したがってローゼンによれば、フッサールは充実を遂行によって定義しているのではなく、作用が遂行可能でなければならないということを意味しているにすぎないのである (S. 66°).

- (12) Elisabeth Ströker: Husserls transzendente Philosophie, Vittorio Klostermann, 1987, S. 50.
- (13) 小論では、範疇形式に関する直観、すなわち純粹範疇的直観を中心に考察したが、周知のように『論理学研究』においては、一般者に関する「普遍的直観」についても述べられている。これは実質的な諸概念についての直観として前者から区別されるが、しかし表意的思念に対する充実という点では純粹範疇的直観と同じ構造に立つものである。『イデーン』第一巻では、共に本質直観として扱われている。
- (14) イデーン第一巻では、これとは逆の方向、すなわち「論理的に形式的なものを、事象を含んだものにする」とは「脱形式化 (Entformalisierung)」と呼ばれる (III. 26)。

（人文科学研究科 博士後期課程 哲学専攻）